「あふれだす生活」

－あふれだし・表出における豊かな動線空間を持つ多世代型集合住宅の提案－

研究の背景

集合住宅においてエントランスから住戸までの動線空間は地域と集合住宅、共用空間と住戸内とそれぞれの領域を繋ぐ中間的領域の役割をもつ。そこは、日常的な挨拶や生活の気配の共有など、住まい手同士のコミュニケーションを生む契機となる空間である。住戸内のインテリアや共用ラウンジ、ゲストルームなどの共用施設の充実に目が向けられる事が多いがでそうした住戸間の日常的な動線空間への関心は低いと言える。動線空間は単なる移動空間としての役割しかもたず、住戸前に、住民の生活表情や気配を感じることも少ない。しかし、共用施設や住戸間を繋ぐ動線空間は通常、集合住宅の延べ床面積の２割程度を占めており、この空間のありようは集合住宅全体に大きな影響を与えると言える。また、多様な性別や年齢の人々が住まう集合住宅において、目的を持って集まる共用施設ではなく、日常の挨拶や気配の共有こそがより良いコミュニティを築くきっかけになるのではないだろうか。動線空間を操作する事は住戸間の繋がりを通して、人と人との繋がりを作る可能性を持つと考えられる。

研究の目的

本研究では集合住宅の動線空間に着目し、実態を調査、分析することで集合住宅における動線空間を豊かにする設計手法を抽出する事し、それに基づいて新しい住まいの形を計画提案することを目的とする。

用語の定義

本研究では「あふれだし」と「表出」の２つの用語を使用し調査、分析を行う。

〈表出〉

植木鉢や置物などの飾り、表札など住み手が何らかの独自性を発揮したいとの意識から外に向かって設える行為及びその行為によって現れたもの。

〈あふれだし〉

意識的な自己表現である「表出」に対して、生活の必要に迫られて致し方なくあるいは無意識的に出てくる物。本研究では洗濯物や掃除用具等の生活の様子を伝えるポジティブなあふれ出し、不要な家電やゴミなどのネガティブなあふれ出しを分けて考察する。

実態調査・分析

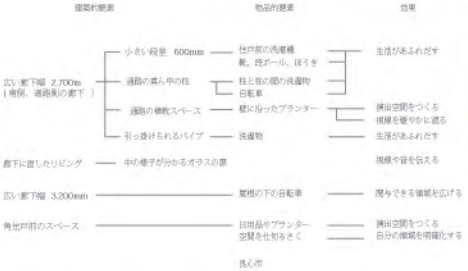
段階的な領域が形成されている集合住宅の動線空間において、あふれ出し・表出の記録を行いその実態を明らかにする。

調査はあふれだし・表出が多く見られた３事例を訪問し、写真撮影とビデオ撮影によって記録をおこなった。記録をもとに図面よりプロット、分析を行い建築的要素とあふれだし・表出の関係性を分析し、動線空間にもたらす効果を考察する。

事例１_沢田マンション
所在地：高知県高知市
用途：集合住宅
規模：地上５階地下１階
敷地面積：1,818 ㎡
住戸数：約 70 世帯

事例２_平良団地
所在地：沖縄県宮古島市
用途：集合住宅
敷地面積：19,415 ㎡
規模：地上３階
住戸数 180 世帯

事例３_島団地
所在地：和歌山県御坊市
用途：集合住宅
規模：地上４階
敷地面積：19,899 ㎡
住戸数：235 世帯



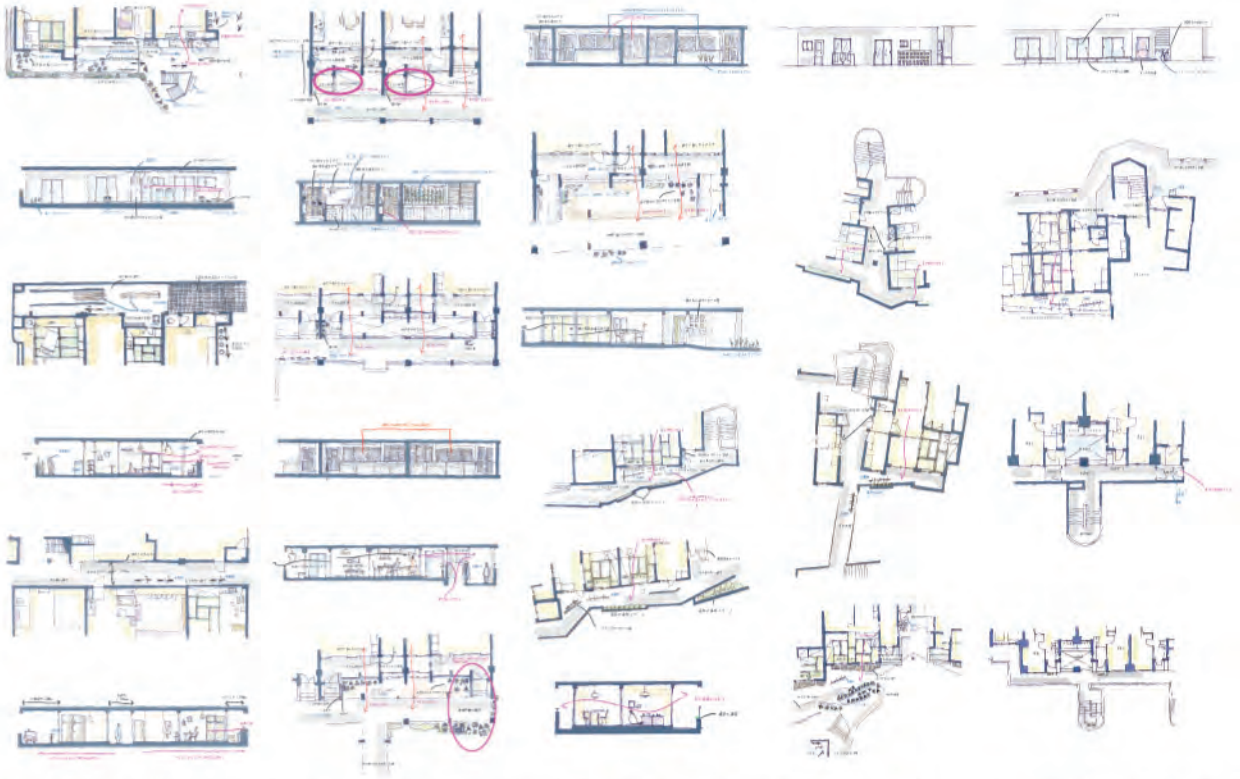
〈要素の分析〉

動線空間に置かれた「物」と置かれている建築的要素の関係を文字で分析し、それらがもたらす効果を考察する。この分析に置ける効果とはプライベート空間である住戸内からパブリック空間である共用廊下を繋ぐ領域に着目した効果とする。

〈図面による分析〉

要素の分析と共に部分的に平面図によって分析を行う。おかえれている物と建築的要素の関係を視覚的にとらえる。どのような場所に物が集中して置かれるか分析を行う。

調査結果



抽出した設計指針・手法

以上の調査から集合住宅の動線空間における３つの設計指針とそれぞれに対する具体的な設計手法の抽出を行った。設計手法はそれらがもたらす効果と共にそれらの手法が住戸内のプライベート（pr）に近い手法からパブリック（pu）に近い手法に分類した。

□住民が関与できる余白空間の計画　−表出を促す手法−

住民が自ら用途や空間のあり方に関与する事が出来る空間を計画する事で住民の自発的な領域形成が誘発される。本調査では飾り棚やエントランスコートなどが余白空間となり住民の演出空間となっている様子が多く観察された。

□豊かな裏空間の共有　−あふれだしを促す手法−

住民同士の裏空間においてあふれだしが行われているか、そうではないかが集合住宅全体の雰囲気や質に多く関わっている事が分かった。裏空間を豊かにするには「住戸内のプラン」「接する周辺環境」「通路自体の形状」「人通り」が要因であると調査から分析された。

□領域の境界に居場所をつくる

地域から集合住宅、共用空間から住戸内と領域が切り替わる境界に人の居場所を設けることで住民同士の交流や表出が促される空間となる。また、共にその空間を管理する事により場に対する愛着や帰属感が生まれる。

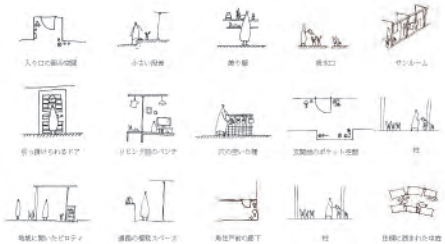
1＿表出を誘発する建築的操作

1_表出を誘発する

飾り棚や段差、引っ掛けフックなどの手法を使って住民が関与できる演出空間をつくる。

Pr　入口の囲み空間，小さい段差，飾り棚，
引っ掛けられるドア，リビング前のベンチ，
穴のあいた棚，玄関前のポケット空間，
住戸前の囲み空間，地域に開いたピロティ空間，
柱、通路の植栽スペース
Pu

効果：関与できる領域を広げる，演出空間をつくる，
住戸の表裏を作る



2＿あふれだしを許容する建築的操作

2_あふれ出しを誘発する

小さな段差やポケット空間などの操作で段階的に領域を分ける事でリビングなどの生活の一部があふれだす。

Pr　中庭に面したベランダ，南側のベランダ，
小さい段差600mm，ヨモンルームにつながるサンルーム
スロープ，ガラスの扉，入口の土間空間，吸水口，
入口の囲み空間，ベランダのブロック塀，
リビング前のベンチ，住戸前の小さなポケット空間，
目線を遮るベランダの壁，階段下の収納スペース，
通路の真ん中の柱，日のあたる廊下，角住戸前の廊下，
広い廊下幅2,700m（南側，通路側の廊下）
先の見えない廊下，地域に開いたピロティ空間，
柱，向かい合わない玄関，住戸から続く空中歩路，
Pu　通路の植栽スペース，住棟に囲まれた中庭

効果：生活があふれだす，自分の領域を明確化する，
生活空間と通路の共存，住戸の表裏を作る

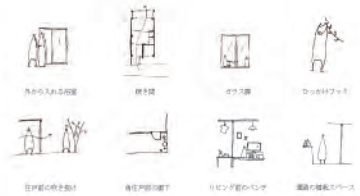
3＿気配を伝える建築的操作

3_気配を伝える

視線や音、臭いなどを伝え、生活の気配を内外に伝える。また、視線を穏やかに遮ることであふれ出しや表出を誘発する。

Pr　外から入れる浴室，続き間，
中の様子が分かるガラスの扉，引っかけフック，
廊下に面したリビング空気や音が通る床，
風や音を通すサッシ，風や音を通すドア，
住戸前の吹き抜け，角住戸前の廊下，
リビングに面した縁側，通路の植栽スペース
敷地境界の覆える柵，広いスロープのアプローチ
Pu

効果：視線を通す，視線を穏やかに遮る，違う階の音が
伝わる，風や音を住戸内に通す，音が伝わる，臭いが伝わる



設計提案

本提案では動線空間のあり方から集合住宅全体のコミュニティの形成の新しい可能性を提案する。

調査から得られた設計指針、に対し「ユーティリティアクセス」「立体的な住戸プラン」「地域に開いたコモンスペース」の3つの空間的提案を行う。これらのの提案は地域と集合住宅、それぞれの住戸間に通る動線空間を豊かにし、それぞれの境界を緩やかに繋ぐ。これまで塀によって閉ざされてきた学生寮と地域を緩やかに繋ぎ地域に開き、地域と大きな共同体を気づける学生寮を提案する。

<ユーティリティアクセス>

住まいにおけるユーティリティ空間とは、洗濯機やアイロンなど家事作業を行うスペース、または部屋を指します。調査の際、一番多かったあふれ出しは洗濯物であり、ユーティリティ空間はあふれ出しの大きな要素となる。

<立体的なプラン>

住戸プランをスキップフロアにする事で、住戸下や屋根部分に余白が生まれる。共用廊下を様々な高さに設定する事により住民の多様な要求を許容出来る空間となる。

<地域に開いたコモンスペース>

周辺地域と集合住宅との境界に互いの居場所となるコモン空間を計画する事で集合住宅が開かれ地域と共同体を築く。

敷地概要

本提案では日本女子大の学生寮を敷地に行う。

周辺地域は住宅地であり対象とする地区は駅から徒歩１０分と利便性は高く、日本女子大学の校舎と隣接している。木造密集地がある地域

○敷地データ

日本女子大学学生寮

敷地面積：1745 ㎡

第一種中高層住居専用地域

建蔽率 60%　容積率 300%

○プログラム

・日本女子大学学生寮（約 120 室 200 名）

・一般住宅（家族世帯・高齢者世帯　30 世帯）

・地域とのコモンスペース（公衆浴場・コモンランドリー・食堂）

・現存している寮の中で最も古い明桂寮をリノベーションし新しい提案に組み込む。

敷地周辺写真＿敷地周辺は塀が建てられ周辺環境と切り離されている

配置計画

敷地は北側が約 10m 高くなっており高低差のある敷地となっている。寮生は高低差の低い南側からアクセスする動線となっている。この寮生の入り口は既存の場所をそのまま利用している。一方、一般住宅側の家族世帯、高齢者世帯は周辺から寄分の住戸にダイレクトにアクセスできる計画となっている。

これまで敷地の周囲は塀によって囲まれ、周辺の地域と切り離されていた敷地を解放し一般住宅を外側に配置する事で段階的な領域を作る。またアクセスを学寮と一般住宅で分ける事によって学寮としてのセキュリティを保持する。

敷地計画

敷地境界の塀を取払い建物をセットバックして建てる事で周囲に敷地を開いていく。明桂寮に面した広場はこの敷地のメインエントランスとして機能し周囲に開かれた広場としての役割を果たす。また、周辺地域と集合住宅、一般住宅と学寮、寮生同士と段階的に広場を計画している。

それぞれの広場には住戸のユーティリティスペースが面していて、それぞれの生活感が現れる広場となる。

地域に開く施設

周辺地域に対し、広場だけでなくいくつかの施設を解放する。西側の広場には公共の「コモンランドリー」が面しておいり周囲の住民ともユーティリティを通して繋がる。一番端に計画された公衆浴場の周辺ではまた、既存の寮である「明桂寮」をリノベーションし食堂や会議室、ホールといった機能を入れ地域とのコモンスペースとする。明桂寮は、この敷地の象徴としての役割を果たし学寮の歴史を残す。

女子寮としてのあり方

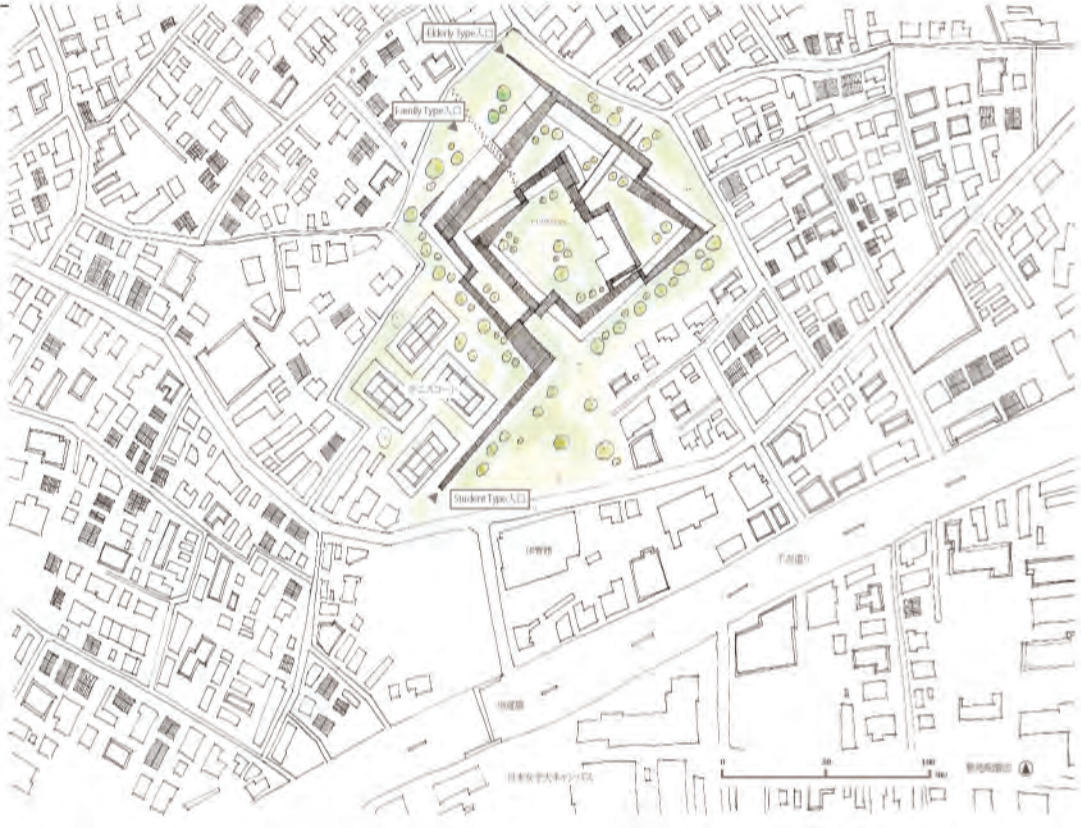
日本女子大学の学寮は 100 年前の学園創設に合わせて女性高等教育の一環として建設された。

単に大学入学のために単身上京するこのために安全で至近な宿泊施設を提供するに止まらない規律や行儀作法を教える教育寮として計画された。かつては…

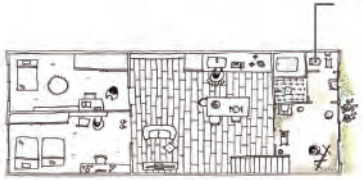
一寮につき寮監１名、寮生 20 名、調理助手１名で１家族

を構成し寮規に従って経済、炊事、整理などから寮風にいたるまで自分たちで決定し生活を行っていた。

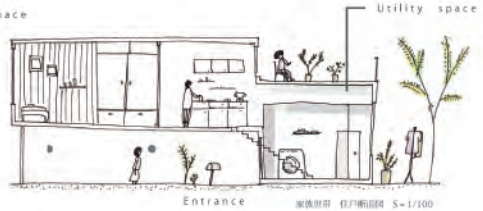
しかし現在ではプライバシーの確保などの理由から１人１部屋の個室となり炊事などを寮生皆で行う事もない。



Family

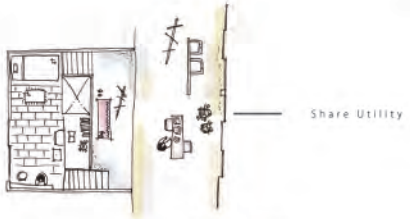


家族世帯 住戸平面図 S=1/100



家族世帯 住戸断面図 S=1/100

Student



学生住戸 住戸平面図 S=1/100

学生住戸 住戸断面図 S=1/100

Elderly

高齢者世帯 住戸平面図 S=1/100

高齢者世帯 住戸断面図 S=1/100